

## 〈書評〉

石川友紀著 『日本移民の地理学的研究』  
——沖繩・広島・山口』  
(榕樹書林, 1997年, 607頁)

杉 浦 直

日本における移民研究は、移民現象に関する学際的・総合的な研究活動の推進を目指す「日本移民学会」の創立(1991年)以来、特に活発化してきたように思われる。アカデミックな出版を見ても、アメリカにおける1924年以前の日本人移民一世を扱ったユージ・イチオカの『一世——黎明期アメリカ移民の物語——』(富田虎雄他訳, 刀水書房, 1992)、児玉正昭の日本出移民に関する『日本移民史研究序説』(溪水社, 1992)、矢ヶ崎典隆『移民農業——カリフォルニアの日本人移民社会——』(古今書院, 1993)、前山隆『エスニシティとブラジル日系人』(お茶の水書房, 1996)、飯野正子『日系カナダ人の歴史』(東京大学出版会, 1997)など、移民や移民エスニック集団を対象とした長年の調査・研究を総括するような研究書が相次いで出版されている。こうしたなかにあって、長年日本からの出移民に関する研究を地理学の立場から積極的に推進してきた石川友紀氏(以下、著者)の大著『日本移民の地理学的研究』(榕樹書林, 1997, 607頁。以下、本書)が出版された。本稿は、本書の出版に寄せ、その内容を紹介・批評するとともに、移民研究における地理学の方法と役割をあらためて考えてみようとしたものである。

本書は、1982年に著者が広島大学に提出した博士論文を骨格としつつも、その後の新しい調査による加筆などを加え、一冊の書にまとめたものである。著者の移民研究は、1964年にはじまり現在に至るまで精力的に継続さ

れている。その意味で本書は30年以上もの長期にわたる研究の集大成であり、文字通り著者にとってのライフワークとすることができよう。

まず、本書の内容を簡単に紹介しておこう。本書は、序論、総論、各論、結論の4部構成からなる。「序論」では、研究史を踏まえつつ、日本からの「出移民の体系的な研究」を行うという研究目的が明らかにされる。著者は、日本における従来の移民研究が世界史的観点からの移民送出の時代区分や国際的に通用する移民類型の用語の使用が欠如してきたことを批判し、地域性をふまえつつも日本の移民現象を世界史的・国際的視野をもって解明することの必要性を強調している。

「総論」は、(出)移民現象についての概論に相当する。第1章では、近代のヨーロッパからの移民及びアジア(中国、インド、シリア・レバノン)からの移民の展開過程や移民送出の方法などが概説される。第2章では日本からの移民が扱われる。ここで特筆すべきは、日本の出入移民を日本国内の人口移動(北海道への移民、人口の都市への集中)と関連づけて論じていることで、移民現象を全体的な人口移動の流れのなかに位置付けて考えていこうという著者の姿勢がよくあらわれている。日本からの出移民については、出移民総数、渡航先地域別・国別移民数、都道府県別移民数などの年次を追っての変化が詳しく分析され、また移民類型を考慮に入れて、契約移民時代、自由・契約移民時代、自由移民時代の3期の時代区分、また北海道移民型、契約移民主体型、自由移民主体型、中国大陸植民主体型の4つの地域類型が設定される。第3章は、日本の出移民史において大きな役割を果たした移民会社についての考察で、その意義、実態、功罪などが詳しく検討される。

「各論」は、分量的にも内容的にも本書の中心部分をなすと言えよう。ここは、さらに大きく3つの部分に分かれる。[I]は、契約移民送出の中心地域である瀬戸内地域からの移民に関する部分であり、移民送出の状況が概説された後、広島県から2つ、山口県から1つの移民母村が事例として選ばれ詳しく分析される。[II]では、自由移民送出の中心地域である

沖縄県に焦点が合わされ、4つの移民母村の調査結果が示される。すなわち、この [I] と [II] は移民の送出地域である日本における移民地域・移民母村の事例研究であり、地域により多少の違いはあるが、それぞれの事例において、移民送出の経緯、移民の年次別数・構成、移民前の職業や土地所有規模、宗教との関係、移民送出の自然的、社会的、経済的背景が詳細に分析され、さらに再渡航や帰国の状況にも目が向けられる。また、沖縄県に関しては、地割制や門中組織との関係など地域的な特殊要因も考慮される。[III] は、日本移民の受け入れ地域・移民先国として、契約移民時代に多くの移民が渡ったハワイ、及び自由・契約移民時代に大量の移民を受け入れたブラジルにおける実態を中心とし、さらにペルー、アルゼンチン、ボリビアの状況も記述される。ここで問題とされるのは基本的に日本人移民の適応過程であり、従事する産業・職業の傾向とその変化、社会階層、移民人口の分布、移民の現状などが詳細に検討される。その際、ハワイでは広島県移民と沖縄県移民が、またブラジルでは沖縄県移民が詳しい分析の対象となっている。

「結論」は、基本的に本書の要約部分であり、この大著の内容が要領よく要約され、読者の理解を助ける。また、海外移民の母村に及ぼした影響も、最後にまとめられている。

以上見てきたように、本書はきわめて壮大なスケールの研究構想を実現した大著であり、その成果の特色や意義を簡単に整理することは難しいが、ここではごく基本的な事柄にしばってそれらを述べてみよう。まず、第一は本書に示された研究の全体的な体系の意義である。著者の研究の目的は、前述したように日本全体の出移民の体系的な研究であり、そのために①日本の出移民地域における移民現象を詳細に追跡した後、②移民受け入れ国における日本人移民の実態を分析する。また、③移民が郷里に帰って以後の母村への影響にも目が向けられる。これまでの日本出移民の研究は①に重点をおくものがほとんどであり、この点②や③にも目を向け、綿密なフィールドワークでそれらの視点をつないでいくという著者の姿勢と努力

は高く評価されねばならない。移民は、人口の空間的移動現象であり、その発生は送出地域と受容地域の双方に要因があるとともに両者に影響を与える。また移民の移動によって両者は機能的にも心情的にもある種の結びつきをもつ。したがって、移民現象というものを真に地域的（地理学的）に理解しようとするれば、送出・受容両方の地域において調査が必要であり、しかも両者を関連づける視点がなければならない。まさに、著者の研究はこうした出移民の地理学的研究の全体的な体系を十分踏まえた本格的なものと言えよう。

次の特色として、対象地域のスケールを踏まえた比較研究による位置付けの視点を挙げておきたい。本研究の中心をなす部分は、何と云っても沖縄県及び広島・山口両県からの出移民の研究であるが、これら両地域からの移民現象を考察するにあたっては常により広い地域の概況が検討され、そのなかでの位置付けが与えられる。例えば、沖縄県出移民の研究は4つほどの移民母村の詳細な事例研究が中心となっているが、それは沖縄県全体の出移民状況を踏まえた上で為される。また、広島県からは2つの移民母村、山口県からは周防大島の事例が分析されるが、全体は瀬戸内地域出移民の概況のなかで位置付けされる。さらに沖縄県や瀬戸内地域の状況は、日本全国の移民史のなかで、時代的にも地域的にもその特性が浮き彫りにされている。そして、前述したように日本の出移民状況も、日本の国内外の人口移動の一環として扱われており、さらには世界全体の移民人口流動の流れのなかで考察されているのである。このように見てくるとき、著者の研究手法はマクロ（グローバル）からミクロ（ローカル）までの多元的スケールをもった研究であり、かつスケール相互間の関係を重視したクロス＝スケールの研究の性格をもつと言える。研究対象地域と分析方法のスケール次元は地理学的研究にとって最も重要な規定要因であり、それを明確に意識した上で多元的スケールの研究の総合を果たしている点が、本書の特筆すべき点の一つとして評価したい。

第三は、本研究で為された研究手法と調査の質・量である。著者は、こ

の空間的にも時間的にもきわめて大きな広がりをもった研究を、移民に対する個別面接調査、現地行政機関における関係資料の発掘、外務省移民関係資料などのマクロな移民資料の分析、文献など関係2次資料の渉猟などを含む調査手法を駆使してまとめあげた。もとより、それに費やされた著者の努力と時間は驚嘆に値するが、評者としてはそうした細部の積み重ねをただ羅列に終わらせず、前述したように移民研究の一つの壮大な体系として集大成した著者の力量を特に高く買いたいと思う。

このように文字通り充実した大著と言える本書ではあるが、移民の地理学的研究の全体的な体系を考えていくとき、いくつかの手薄な点、相対的に欠落している側面、はもちろん指摘し得る。評者にとって少し物足りなく感じた点の一つは、本書が「移民の地理学的研究」の方法論を従来の地理学的研究の展望から明示的に議論し、そのなかで著者のとった方法の位置付けと意義を明確にする手続きを必ずしもとっていないということである。本書では「序論」第3節において「研究史及び本研究の意義」が述べられ、これまでの研究史がかなり詳しく検討される。しかし、その検討においては、個々の研究の方法の特色はある程度明らかにされるが、それぞれの方法についての著者からの意義付けや評価は必ずしも鮮明にされていない。また、この研究史の展望は、必ずしも地理学の方法論を意識したものではない。したがって、これらを踏まえて出されてきた著者の結論は、欠落部分として「世界史的位置付けの不十分さ」や「日本の移民現象を国全体として扱い…地域的考察に欠ける」などの日本の移民研究全般についての一般的欠落傾向を指摘するにとどまっている。評者がさらに期待したいのは、地理学の方法論を意識した研究展望から敷衍される移民の地理学研究の方法論、移民研究において地理学はどのような独自の役割を果たし得るか、という点である。

このような点を意識しつつ本書の各項における検討手法を見ると、全体として正攻法的な記述重視の手法をとっていることが最大の特徴と言える。さまざまなスケールの各地域からの出移民数（あるいは在留者数、帰国者

数など)とその構成が年次的に詳細に表化される。これはもちろん基礎的データの提供として大変貴重であり、また安易簡便に為し得る作業ではないが、さらにそれらをパターン化したり、また他の指標を加えた相関分析を行ってそこから得られる情報を圧縮して示す努力がもう少しなされてもよかったのではあるまいか。

また、基本的に本書の内容は経験的に把握できる表層の事実の積み重ねから成立している。本書の基本的性格からしてこれはこれでよいのだが、評者としてはさらに移民現象の背景にある文化的・人間的性質により深い目を向けてほしかった気がする。移民は、人間が空間を移動する現象であるが、当然そこには文化的負荷をもつ人間(個人)の価値判断があり、情報解釈があり、環境認知がからんでくる。また、個人のレベルの行動が集合的レベルに高まるプロセスがあり、そこにはシンボリックな意味の生成やシンボルをめぐるアイデンティティの結集がある。近年の人文地理学(文化・社会地理学)は、人と空間をめぐる心理-社会的なプロセスを重視する傾向をますます強めてきており、移民現象はそうした方向の考察に格好な材料を提供している。ここに今後の発展を期する大きな分野が残されていると言えよう。

前述したように、本書の中心課題は出移民、すなわち日本から出ていった移民にある。ハワイやブラジルなど移民先国における実態の検討がかなり大きな部分を占めるとはいえ、そこにおける基本的関心は広島県移民や沖縄県移民など日本の特定の地域から出ていった移民たちを集団として追跡するという視点である。しかしながら、移民の研究にはもう一つの大きな観点があることを忘れてはならない。それは、さまざまな出身地、出身国から来た移民たちが一つの国、一つの地域のなかに相対的に混住し相互に接触しあって新たなシステムの社会(エスニック社会)を形成していくというプロセスである。このような「入移民」さらにはエスニシティの視点をもった移民の研究は、もちろん移民史や社会学、人類学など人文・社会科学の諸分野で活発に行われてきたが、地理学的な視点からみてもそこ

には多くの本質的な課題がからんでくる。すなわち、移民集団は母国の文化—社会的状況を背景としつつも、そこから切り離され異国に定住・適応する過程において、居住の混合や隔離（セグリゲーション）、エスニックな領域（社会空間）の形成と変容、環境への適応と経済活動への参与、文化景観への刻印など、さまざまな空間（地域、環境）と人間との諸関係を示す。日本移民の研究において、このような観点を重視した地理学的研究は、前述した矢ヶ崎（1993）のカリフォルニアにおける日本人移民農業に関する著作を除けばまとまった大きな成果がなく、量的にも質的にも立ち後れている研究分野と言えよう。

以上のような欠落分野や残された課題の存在は、もちろん本書の価値を低からしめるものではない。どのような大著であってもすべての側面を含むわけにはいかないことは言うまでもない。上で指摘した点は、もちろん著者の今後の研究によってもその一部は補われていくであろうが、多くは評者をも含めた著者に続く世代の移民地理学研究者につきつけられた課題として受けとめねばなるまい。いずれにしても、前述した兎玉（1992）に続く本書の出版によって、日本の出移民研究は確固とした基礎と全体的な見通しをもつことになったことは間違いない。また、矢ヶ崎（1993）の書とともに、移民研究という学際的な場における地理学者の存在とその役割を改めて強烈にアピールすることになった。本書の出版を機に、日本の移民研究がさらに活発化し、地理学者もそこに積極的に関与していくことを念じて筆を擱きたい。